

HO2 スミレ





生い立ち

物心ついたときにはもう親はいなかった。
受け入れてもらった孤児院は貧乏だったため、子どもたち全員が仕事に出ていた。
僕は靴磨きやビラ配りなどをしていたが、余ったビラの裏に絵を描き始めたのがきっかけで、絵が趣味になった。
絵を描いているときだけは、貧しい現実を忘れられた。
風景や人、花……、目についたものをなんでも描いて。
そして、親友のジーナだけがそのことを知っていて、僕の絵をいつも褒めてくれていた。

「あ、また絵を描いてる」

「ジーナ、帰ってきたんだ。おかえり」


「ただいま。相変わらず上手だね」

「本当に？」

「うん！ ここの描き方がいいとか詳しくはわからないけど、スマレの絵ってなんか良い！」

「……ありがとう」

ジーナは明るく前向きで賢い女の子だった。
少しおせっかいが過ぎることもあったが、僕の面倒をよく見てくれた。
彼女は『大きくなったら』『将来は』といつも未来を見据え、独学で字を学んでいた。
僕は文字の読み書きができなかったから、字を教えてほしいと頼むと、代わりに自分の絵を描いてほしいと返された。
そのときは技術も画材もなかったので、結局、互いの約束は果たせなかった。





孤児院から屋敷へ



はじめはジーナが富豪の家に引き取られる予定だった。
しかし、彼女が僕も一緒にと頼み込んで、僕もその家に引き取られることになる。
はじめは大きな屋敷に住むことになって浮かれていた。
主人が魔法使いに多額の金を積み、僕たちに魔法をかけるよう依頼するまでは。
肩に痣^{あざ}を持つ男は笑顔で答えた、「わかりました」と。
その言葉を聞いた瞬間、僕の視界はぼやけていった。

魔法について

この世界には魔法が存在する。
魔法は人智を超えた力として、魔法を使う者はおそれられている。
僕にかけられた魔法は、体の自己再生力を高めるものだった。
傷がついてもすぐに治り、細胞が老化してもすぐに再生するため人よりもずっと長く生きられるという。
どんなにけがを負っても無茶をしてもすぐ治るので、屋敷では肉体労働を強いられた。
傷がすぐ治る僕をおもしろがって、高いところから落としたり、火傷を負わせてきたりする者もいた。
抵抗すれば殴られて、蹴られて、痛みだけが体に残り続けた。
そんなことが続き、やがて、抵抗することはなくなった。
地獄のような数年間をその屋敷で過ごした。

ジーナは精神に作用する魔法をかけられたようだった。





同じ屋敷に住んでいるのに、久しぶりに会ったジーナに自我はなく、ただ主人の言うことをなんでも聞く人形のようにになっていた。

未来を見つめ、輝いた瞳を持つ彼女はもうどこにもいない。

魔法使いや魔女はおそれの対象だ。

また、魔法をかけられた者も同様におそれられる存在なのだと、嘲笑しながら主人は言った。

魔法をかけられた僕たちは人として扱われず、やがて、ジーナは過労で亡くなった。

亡くなる直前、床に臥せたジーナと会うことができた。

意思のない彼女にかけられる言葉はなく、僕はただ泣いていた。

そんな僕の手に触れたのは……ジーナだ。

驚き彼女を見つめると、もう動かないと思っていた口が開く。

「ごめんね。逃げて。スマレは、生きて」

それは間違いなく、ジーナの言葉だった。

僕は屋敷から逃げ出した。

生きるために、走り続けた。

憎い。

僕たちに魔法をかけた奴も。

僕たちを人として扱わなかった奴らも。

すべてが憎かった。

逃げた先で

寝ずに走り続けてどのくらい経ったかわからない。





気づけば山の中にいた。

かすむ目で歩き続ける。

とにかく人がいる場所へ——人がいる場所へ行って、どうするんだ。

魔法をかけられた人間はおそれられる。

そうでなくても、屋敷の人間のように、おもしろがって傷つけてくる人間もいるかもしれない。

もはや人ではない僕が、誰に助けを求められるというんだ。

頭がうまく回らない。

そして、ふらついた体はそのまま崖を滑り落ちていった。

ずいぶん高いところから落ちたようだ。

腕と片足の骨がひどい折れ方をして、出血していた。

傷がすぐに治るとはいえ、骨を折るほどのけがをすれば治癒に時間がかかる。

幸い、近くに雨風が凌げそうな小屋があったので足を引きずり中へ入った。

こんな山奥にある小屋にしては小綺麗だ。

誰か住んでいるのかもしれない……、だとしたらどうする。

考えようにも思考力も血も足りず、奥まった場所にある部屋へ逃げ込むように入ると、意識を手放した。





虫の声で目が覚めた。

外は暗かったが、月明かりのおかげで自身の姿は見える。

腕はある程度動かせるようになったが、どうにも足の治りが遅い。

さすがに血を流しすぎたか、無理をして走りすぎたか。





そんなことを考えていると——人の息遣いを感じた。
この部屋の取っ手を握る音がして、とっさに「開けるな」と声を出した。
緩やかではあるが、体は再生している。
この様子を見られては、いけない。

ロールプレイの指針

物静かではあるが、明るいジーナと過ごしていたため口数は少ない。
魔法のせいで苦しんできたため、魔法がかけられていることを誰かに知られたくない。
隠すためにウソをつくこともあるだろう。

